

[公演ノート]

# アメリカ桜祭り公演 (Taiko & Dance 2013) における国際教育

## American Cherry Blossom Festival Performances of Taiko & Dance 2013 and International Education

松村悠実子

Yumiko Matsumura

〈抄 録〉

アメリカ桜祭り公演の教育的意義を、国際教育の観点から考察します。特に2013年度の公演を基に記述しています。

Abstract

This essay is an international educational analysis of the Taiko and Dance performances at the American Cherry Blossom Festival Performances, especially in 2013.

### はじめに

アメリカ桜祭り公演の研修の目的として日米の国際交流が挙げられます。約二か月にわたる準備期間と三週間の現地での公演・研修において、学生達は事前のリサーチと実地での経験から「舞台芸術」を通しての国際交流を体感・学修します。国際交流の内容には以下三種の観点があります。第一にこの研修では、学生は出演するだけでなく、全員で会場（劇場）の仕込み（舞台準備）を行います。ここで現地の劇場や大学のスタッフの方と協力し、舞台・照明・音響・楽屋・受付をセッティングします。ここで現地の方々との交流があります。第二に、大学での公演の場合、各大学の学生達との交流の機会（ランチタイム、キャンパスツアー、ワークショップ）が設けられています。第三に、パフォーマンスを通しての観客との交流があります。

### 1. 劇場スタッフとの交流

舞台公演を行うために、学生達は、「舞台監督」「振付助手」「照明」「道具」「音響」「衣裳」「記録映像」「太鼓」「荷物」「制作」の部署に分かれて作業を担当します。各大学・劇場には、管理者と、ほとんどの場合プロの舞台技術者がついています。その方達に会場のルールや、機構、使用方法などを聞き、相談しながら仕込みを行います。

学生達が日本で用意したことを、会場ごとに異なる状況に合わせ、臨機応変に対応していきます。そのために現地のスタッフとの相談が欠かせません。身振り手振りを加えながら、目で確認して、一

緒に操作をしながら準備を進めていきます。現地の方達と一緒に仕事をするということは、技術の習得も含め、学生達にとってとても大きな経験です。ツアーの初めの頃には、通訳の教員にまず聞くことも多いですが、その順番を待っているのは、準備が間に合いませんので、学生達は次第に率先して現地の方達に話しかけ、どうしたら伝わるか、どうしたら相手の言っていることがわかるか、試行錯誤しながら進めていけるようになります。また準備したことが出来なくなる場合もあります。その場で何が出来るか、最適な結論を短時間でお互いが理解し合いながら答えを導き、そしてそれを実践していきます。

## 2. 現地学生との交流

大学では、現地の学生（大学によって、日本語を専攻している学生、芸術を専攻している学生など）の引率により、大学のカフェテリアで一緒にランチをします。カフェテリアの使い方を含め、現地の学生と玉川の学生がグループになり行動していきます。またランチ後、キャンパスツアーと称して大学内を案内してもらいます。アメリカの大学生の生活を垣間見ながら、新しい発見や共通点を話しながら、お互いの理解を深めていきます。

コルゲート大学では、小山正教授と学生達主導のもと、阿波踊りのワークショップを行いました。参加者はコルゲート大学の学生と地域の方々でした。サウスモア大学ではヨガのワークショップを現地の学生と共に受けました。

## 3. 観客との交流

日本で公演を行う場合、学生達の公演ではその観客の多くは、家族や友人が主になります。しかし、アメリカでの公演はそういった知り合いはいません。したがって学生達にとって普段以上にハードルの高い公演であると言えます。また観客の反応も日本の観客と違います。拍手のタイミング、また物語のある踊りの中での観客の反応など、まさに「言葉を越えた」感動を伝えられるか、また「どう」伝わっているのか、ダイレクトな反応を得られる「上演芸術」ならではの学修体験となります。また終演後必ずロビーに出て、観客の方から直接感想を聞く機会を設けています。学生達は地元の子供達、学生、お年寄りと年齢層豊かな観客の方々からの意見や感想を聞くことが出来、自分たちのパフォーマンスの成果とそして課題を見出していきます。

## おわりに

以上三つの観点を総合し、この研修で得た国際交流の成果として以下のようにまとめることが出来ます。

まず、学生達は専門分野である、舞台表現者として「異国で日本の作品を上演する」ということを学修し、アメリカの公演会場で仕込みから本番、バラシ（片づけ）、技術的側面での成果が見られました。これは単に機械操作のみの技術力だけでなく、相談・交渉といったコミュニケーション能力の向上も含まれます。

更に、現地での学生達との交流を通して、自分と現地の学生、ひいては日本とアメリカの相違点などを知ることが出来、相互理解と共に、自らの将来を考える上で新しいきっかけとなっています。

最後に公演を通じて日本文化を伝え、人と人の交流をしていく、芸術学部のミッションである、芸

術を通しての社会貢献を自らの身体を以て行うことが出来、芸術を学ぶ者としての「国際交流」を実践・体感できたと考えます。

### 2013年度アメリカ桜祭り公演 Taiko&Dance 2013公演日程

3/29	コロンビア大学	公演
4/1	コルゲート大学	公演、公演後、レセプション
4/3	ハミルトン大学	ワークショップ、公演、レセプション
4/5	ウエストチェスター大学	ワークショップ、公演、レセプション
4/6	ペインテッドブライド・アートセンター	公演
4/7	スワースモア大学	ワークショップ、公演
4/8	MLBフィリーズVSメッツのオープニング	公演
4/9	ウエストタウン高校	公演
4/11	レストラン「KUSHI」	公演
4/12	Freer美術館前	公演
4/12	ジャパン・ボール	公演
4/13	ワシントン桜祭り	パレード・「祭」開場 公演
4/14	フィラデルフィア桜祭り	公演

### 2012、2013年度参加学生（太鼓・舞踊作品出演、部署：太鼓）の感想（抜粋）

一年目は、人生初の海外、アメリカで、異文化の環境に触れながら、自国の文化を伝えていく楽しさや、難しさを感じることができた。ただただ新しいことに発見を繰り返していく実習だった。

二年目は、自分たちのパフォーマンスの重要性や意味を知ることができた。それを実感したのは、パフォーマンスが終わった時のお客さんの拍手や歓声、そして客だしの時のお客さんのリアクション、パフォーマンス終了後の交流でのお客さんのコメント。多少日本よりオーバーなところがあるとはいえ、やはり喜んでくれている姿を見ると、パフォーマンスをする意味があると感じることができた。

たくさんの人と出会い、交流し、想いを感じた。公演のことだけでなく、アメリカという国で、日本では出来ない経験もたくさんした。異文化に降り、日本の文化への意識もとても高まった。

### 2008年度参加の卒業生（部署：舞台監督）の感想（抜粋）

アメリカ公演の際に大切にしていた「集中力」「やる気」「向上心」「協調性」「体調管理」は今もなお、働くベースとなっています。これらは、どのような仕事をするにもベースになることです。舞台に関する専門分野に特化した学生生活を送っていると、就職を考える際に舞台関係以外の職を選ぶのに躊躇することもあると思います。しかし、視野を広く持ち、自分自身と正面から向き合い、自分が本当にやりたいこと・自分に向いていることをやるべきです。私の場合、それに気づき、自分と向き合い、将来を考えることが出来たのはアメリカ公演に参加したからです。